

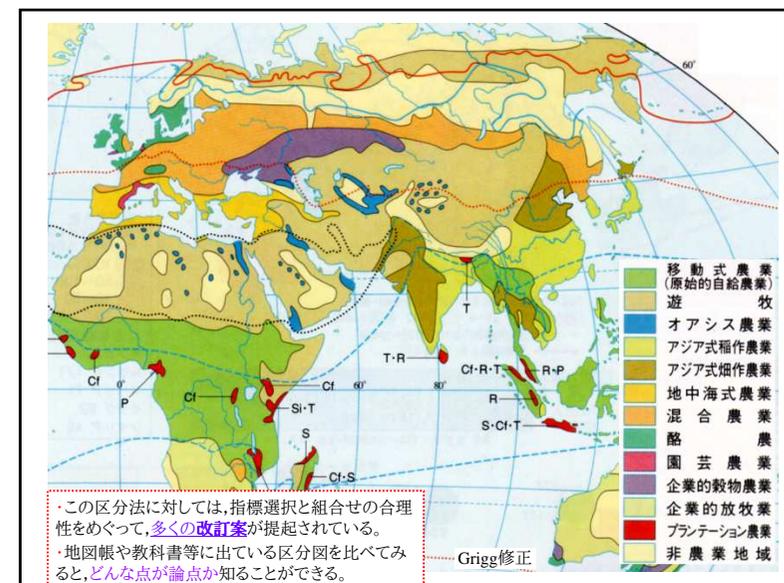
### 農業の地域性をとらえる

- ・「農業」は、「集落」とともに、人間が地表に刻んだ文化景観の代表。
- ・農業の地域性に関する研究は、AndesやAlpsにおける海拔高度による景観分化や、「集落」の構成要素としての「耕地」の地割形態や利用方法として、近代地理学の初期から対象とされてきた。
- ・それらの説明原理は、前者が自然条件、後者は歴史文化条件が主だった(といえる)。
- ・他方、Koeppen気候区分に代表される世界の自然地域区分の成果をうけて、自然景観と文化景観を加味した、世界の「総合的」(natural)地域区分が試みられる。
- ・「農業」はその重要指標とされて、いくつかの世界の農業地域区分が提案された。

※ここでの「natural」は、自然景観と文化景観をあわせた「トータル」な景観特性の意味。自然地理学の「自然」に該当する英語は「physical」

・このうち、今も広く知られているのが、ホイットルシー(D. Whittlesey)による区分。自然条件, 経済条件, 文化的要素を加えた「総合的」な視点による区分図を示した。

※Whittlesey (1890-1956)は、シカゴ大でSemple (Ratzelの弟子, アメリカ地理学の第一世代)から地理学を学び、1928年、ハーバード大の地質地理学科に移籍。政治地域の形成と変容論, 複合指標による地域論を展開。



## Whittlesey区分の問題点

### 1. 区分基準の一貫性

- ・「5要素」の優先関係が不明
- ・理論的分類と経験的区分が混在
- ※「農業」は総合的・文化的営みである点にむずかしさ。

### 2. 「まとまり」認定の恣意性

#### 1) 「まとまり」認定の限界

eg. 「園芸農業」... 都市の近郊なら世界どこでも行われている。どれほど面的に「まとまり」っていれば、「世界的」な農業地域と認定するのか？

#### 2) 区分精度の不均一

... 西欧に詳しく、他では粗い区分  
eg. アフリカの低緯度地帯が「焼畑移動耕作」でひとまとめにされている。  
※詳しくみれば、この地域の焼畑は、イモ類（熱帯雨林）と雑穀の地域（サバナ）に分かれる。

### 3) 地域の「代表的」な農業の判断基準

eg. ジャワ ... 「プランテーション」もあるが、ジャワ＝「穀物の島」の語源のとおり、伝統の灌漑水利に支えられた集約的稲作地域。古代王国～植民地時代を通じて、東南アジアの食料庫であった。

### 3. 農業技術の発達による変化

・とりわけ1960年頃以降の農業技術の発達で、各地で農業が変化  
eg. 乾燥地帯での灌漑の整備 ... アム・シルダリア川の流域、ナイル川下流域に巨大な灌漑農業地帯（主に綿花の商業生産）が出現。  
eg. アジアでの「緑の革命」... 米・麦の増産、機械化・商業化の進展

## 「地域区分」の客観性と主観性

・こうした問題点の一方で、Whittleseyの区分は今も世界的によく知られ、修正版が地図帳に掲載されている。

・それは、この区分が、諸指標を機械的に組み合わせて作られたものではなく、予め世界の農業の地域性について経験的な認識があり、それを考慮しながら区分の基準と手順を案出したため。

・つまり、人間要素がからむ地域区分は、客観基準だけでは、経験的認識と適合しない場合があるということ。

※ただし、経験＝予断を持ちすぎるのはさらに問題。地域性の発見を見逃してしまう。

・これは、地域区分だけでなく、地域性の描出にも共通することであり、さらには「地理学」自体に内在する特徴でもあり、問題点でもある。

・「地域性」とは、地表の「調和像」の一部を体現するものであり、単に「科学的」な客観基準だけでは割り切れない、複雑で総合的で、長年の観察を通じた得た経験的認識なしではとらえきれない、といえる。

・論理性・科学性に徹すると、しばしば実態にあわない区分になってしまう。

・科学性と経験の整合が、地理学の難しい点であり、面白さでもある。

・「超科学性」を抱えたこうした世界の地域区分研究は、その後あまり行われなくなり、地域や事象を限定して、研究手続きの科学性を優先させた研究が主流となる。

⇒ 文化景観形成の経済的背景を扱う「経済地理学」が隆盛を迎える。